



## 「変わらない恵み」

るうてるホーム常務理事 石倉智史

誰もが穏やかな一年を願うであろう 2024 年の年明けに私たちが目にした現実、私になにげなく迎えた日と同じ一日での出来事でした。これまで南海トラフ大地震に備えて、幾度となく危機感を募らせてはいましたが、「まさか」は通用しないことを改めて知らされた思いです。被害に遭われた皆さまに、そしてご家族や大切な方々を亡くされた皆さまへ、神様の豊かな平安がありますようお願いいたします。

さて、今から 130 年前の 1893 年、日本福音ルーテル教会は、アメリカの南部一致ルーテル教会から派遣された宣教師によって佐賀県で宣教を開始したことがはじまりです。当時、第一次世界大戦後のインフレでの米騒動や貧困、病気のまん延、人身売買などが全国的に起こっていた時期に、宣教師たちは自宅に孤児たちの面倒をみていましたが何かと手狭になったこともあり、熊本県に土地を手に入れ、初めての社会事業となる「慈愛園」（コロニー・オブ・メルシー事業）を 1919 年に熊本県でスタートさせました。その後、1923 年には関東大震災が発生しました。教会は被災した母子、老人の救済事業（後のベタニヤホーム、東京老人ホーム）をスペイン公館の敷地内で行うこととなり、1931 年には千葉県において虚弱児童を療養する事業（後の千葉ベタニヤホーム）に取り組むなど、まさに「行いのともなった信仰」が現わされてきた時代ではなかったかと思えます。

そのような働きに刺激を受けたルーテル教会の「婦人会連盟（現在は女性会連盟）」の方々が、第二次世界大戦後の日本の社会保障が

まだまだ救貧の時代であったとき、引退牧師や牧師夫人の老後をなんとかできないかという思いにより、教会とともにはじめた「大阪老人ホーム設立事業」が後のるうてるホーム誕生（1965 年）の背景となっています。

このように日本において 100 年以上にわたって紡がれてきた神様の豊かな恵みは、今危機にさらされていると感じています。

一つは、福祉を担う働き手の不足です。全国の約 70% の事業所が人員不足を感じているという調査がありました。特に訪問介護（ホームヘルパー）事業で働く職員は 4 人に 1 人は 65 歳以上で、有効求人倍率は、なんと 1.5 倍を超えています。このように何らかの支援が必要な方々に対して、その生活を支える担い手の絶対数が足りないのです。100 年前に比べ、制度は充実し、社会的な認知度も上がってきましたが、支える側の状況が大きく変化してきました。介護福祉士養成校は、20 年前に比べ約 3 割減少し、それにともない入学者数も 4 分の 1 にまで落ちています。政府の推計では、2040 年には現在より 69 万人の介護に携わる人が必要とされていますが、確保はまず不可能な数字であると思います。

二つ目は、福祉事業者の多くが旧態依然のままであることです。社会状況の変化に合わせ、多くの営利企業体は変化を遂げてきました。社会福祉法人はそもそも営利を目的としていませんが、時代の変化に対応してきているとは思いません。

三つ目は、社会の在り方が「自己責任」を偏重していることです。人間一人ひとり弱

い存在です。自己責任によってのみ人の存在が語られる社会は、はたして健全な社会なのでしょうか。神様は現代のこの世の中においてもなお恵みを与え続けられています。神様によって成し遂げられた私たちの事業が、

これからも存在し続けることができるかどうかは、私たち一人ひとりが目の前にある事実を真摯に受け止め、希望を絶やさずに祈ることにあるのではないのでしょうか。

## 「るうてるフェスタ」について

総務部 土谷友子

地域交流委員会の計画のひとつとして、「地域の方と交流、共に創るお祭り」を企画しています。

2014年に初回「ウエルカムるうてる祭」を開催し、翌年から「るうてるフェスタ」と名称を変え、10年目を迎えました。コロナ禍で2年間は開催を見送りましたが、昨年11月に3年ぶりに開催することができました。

今回の「るうてるフェスタ」は「災害」をテーマに、危機管理委員会、RO委員会との共同企画としました。非常時用品展示や消火器の使用体験、防災に関するクイズも行い、お客様とのやりとりも楽しい時間となりました。

また、非常食体験では、ポリ袋で作るごはん「ホットパッククッキング」（ポリ袋に米と水を入れ、鍋に入れて煮る）を試作し、「意外と簡単においしく出来るね」と感心されてい

ました。

今回の目玉企画である櫓大悟・裕鼓さんを迎えての「河内音頭」では入居者も参加され、大いに盛り上がり、例年協賛していただいている障がい福祉事業所の物品販売、入居者・職員の作品展示会も同時に行いました。

これからも入居者・地域の方々とのつながりを深められるよう、「明るい・親しみのある・開かれた施設、るうてるホーム」として地域づくりの一端を担うこの取り組みが続けられるようにと願っています。

開催に向けては、関係者と幾度も話し合いや打ち合わせを重ね、「るうてる力」による協力体制が土台となっています。参加された方からの「また来年も楽しみにしているよ。」の声を励みに、来年の開催に向けてスタートしていきます。

## るうてるホーム スピリチュアルケア研修 「マインドフルネス」って?~研修企画を通じて~

るうてるホームでは毎年スピリチュアルケア研修を開催しています。私たちが日々大切にしたい「るうてるケア」について学ぶ大切な研修の一つです。スピリチュアルというと、神秘的な目に見えない何かのようにも感じますが、そこに「ケア」という言葉が加わることで一気に私たちにとって身近な言葉になります。「想いに寄り添う」、「心がつながる」など、捉え方は人それぞれで何が正しいとは言えませんが、私たちの理念である「支えられつつ支えて」という、形では表せないものを改めて考え、振り返ることができる貴重な研修です。

今年はどうのような講師をお招きして、私たちの学びがより深いものになるのか、企画の段階から私たちは携わることができました。大柴理事長よりるうてるホームにもつながりのある上智大学の篠田先生をご紹介いただきました。テーマは「マインドフルネス」という聞きなれない言葉に多少戸惑いましたが、どのような研修内容になるのかとても楽しみに思いました。

「マインドフルネスって何?」私たちがまず初めに感じたことです。打ち合わせで、自己覚知や自己肯定感につながるような内容にならないかと篠田先生へ相談し依頼させてい

ただくと、快く応じてくださいました。

2023 年 11 月 26 日、40 名の職員が受講しました。「今現在の瞬間に物事に、意図的に価値判断せずに注意を払うことによって、気づきを得る。」理解できたような、できないような、難しい言葉もありました。先生から「自分の身体の変化に気づけますか？」の質問でこの研修のテーマに改めて気づくことができました。

受講してみて気づいたことは、「自分の感情

にハイジャックされない」、「あるがままを認める」など、そのままの自分を受け入れることへの難しさがありました。自分に向き合うことを恐れずに、「自分の感情を否定せず向き合い、自分を受け入れることで他の人を受け入れることができる」とこの研修で学びました。みんながそれぞれの「個性」「自分らしさ」を活かしたケアをおこなえるよう実践していきます。(担当：杉本・大野原・三木)

## 「あなたがいてよかった。」

通所事業部 田中恭子

「未来を担う看護師のたまごたちに介護士の私が何を伝えられるのか？」これが私の最初の感想でした。宝塚大学看護学生が半日の実習に来るので介護の視点から話をしてほしいとの依頼に、「いやいや、介護をしたいわけじゃないし。」って絶対思われるよ。事例を話したって、苦労話をしたって興味わかないよ。とネガティブな思考の中、考えに考え私は看護と介護の共通点について話すことにしました。

きちんと調べてみようと思っても、検索してみても、相違点は沢山出てくるのに対し、共通点は「サポートをすること」という点のみで具体的な内容は出てきませんでした。

さかのぼること今から 30 年前。私は「人の役に立つ仕事をしよう。資格を取って将来困らないようにしよう。」という想いでこの道に進みました。しかし、介護という仕事の知識については、“入浴やオムツ交換等、身の回りのお世話”という漠然としたものでした。

そんな中、催し物会場で案内のアルバイトをしていたある日、「ここにはどうやって行けばいいの？ ややくしくて・・・」と不安そうに老婦人が尋ねてこられたので案内をすると、「よかった。あなたが居てよかったわ。」と仰って老婦人は安堵の表情で会場に入っていくというエピソードがありました。私は「ああ、こんな風に人に言ってもらえる人間にな

ろう。もしかして介護とはこういう仕事なのかも知れない。」と思ったことを共通点を探す中で思い出しました。

介護と看護の共通点も基本はそういう「心のサポート」なのではないかと思った私は、宝塚大学の看護学生さんたちにこの話しました。学生さんたちにどれだけ伝わったかは分かりませんが、今回のことで私は改めて大切にしたい信念であることを再確認することができました。

病気で治療をされている方も介護の支援を受けている方も大なり小なり不安や寂しさ、孤独、自信喪失、これらを感じて生きておられます。抱える悩みやストレスに寄り添い、安心して生活できるよう、また不安なく最期を迎えられるよう「あなたがいてよかった。」

「あなたたちがいてよかった。」そう思って頂ける温かい支援を忘れないようにしていきたいです。



